

久保園遺跡 5

—第6次調査報告—

2023

福岡市教育委員会

久保園遺跡5

—第6次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1470集



遺跡略号 KBZ - 6

調査番号 2108

2023

福岡市教育委員会



1 第6次調査区(北から)



2 第6次調査区(南から)



3 第6次調査発掘作業風景(西から)



4 第6次調査区(西から)



5 第6次調査西調査区下面(西から)



6 第6次調査西調査区下面(北から)

序

福岡市は玄界灘を介して大陸・半島と一衣帶水の関係にあり、古くから交流がおこなわれてきました。なかでも博多湾岸には、先史時代から中・近世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の都市化により失われる文化財を保護し、後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、福岡平野東部に立地する久保園遺跡第6次調査について報告するものです。この発掘調査では前1世紀頃の弥生中期の水路が検出され、弥生時代や近世の遺物が検出されました。これらは郷土の歴史の解明するうえで重要な資料となるものです。

本書が文化財保護にたいする理解を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご指導を賜りました。心より御礼申し上げます。

令和5年3月23日

福岡市教育委員会
教育長 石橋 正信

例　　言

- 本書は福岡市が令和3年度に福岡市博多区大字上白井で実施した久保園遺跡第6次調査の報告書である。
- 発掘調査および整理報告書作成は、受託事業として実施した。
- 実測図作成および写真撮影の実施担当は、以下のとおりである。

業務内容	担当者
遺構実測図作成	常松 幹雄、藤野 雅基
遺構写真撮影	常松
遺物実測図作成	山崎 賀代子
遺物写真撮影	常松
製図	常松、山崎 賀代子

- 本文に掲載した公共座標は世界測地系である。
- 本文中に掲載した方位は、座標北を示す。
- 本書に使用した国土地理院データは福岡市WEBGISの情報をもとに作成したものである。
- 本文中に使用する遺構略号とその性格は、以下のとおりである。
SD：溝 SE：井戸 SK：土坑 P：柱穴 SX：その他の遺構
- 本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
- 本書の編集・執筆は常松が行った。

遺跡名	久保園遺跡	調査次数	6 次	調査略号	KBZ- 6
調査番号	2108	分布地図図幅名	022 上白井	遺跡登録番号	0083
調査地	福岡市博多区大字上白井字屋敷 295 番			調査面積	200m ²
調査期間	令和3(2021)年4月19日～令和3(2021)年6月28日				
整理期間	令和4(2022)年4月 1日～令和5(2023)年3月31日				

本文目次

I.はじめに.....	1
II.立地と環境.....	1
III.調査の記録.....	7
IV.弥生時代の久保園遺跡.....	14
V.まとめ	18

I. はじめに

1. 調査に至る経緯と概要

福岡市教育委員会は、令和2年5月20日、福岡管区気象台から提出された福岡市博多区大字上白井字屋敷における埋蔵文化財の有無についての照会を受理した（事前審査番号20-1-20）。これを受けた埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である久保園遺跡に含まれることから同年11月25日、試掘調査を実施した。

試掘調査によって、地表面下2.3mにおいて遺構の存在を確認したことから協議を行った。その結果、今回予定されている開発にたいして埋蔵文化財への影響は回避できないとみられることから、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

令和3年3月26日に福岡管区気象台と福岡市で埋蔵文化財調査業務委託契約書を交わした。発掘調査は令和3年4月19日～6月28日にかけて行い、令和4年度に資料整理および報告書作成を実施した。

関係機関ならびに関係者には発掘現場の条件整備について迅速な対応をはかっていただいた。また調査内容について地元説明会の実施など、埋蔵文化財の歴史的価値について周知をはかる機会を得ることができた。

2. 調査の組織

調査委託：福岡管区気象台

調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査：令和3年度・資料整理：令和4年度）

調査総括：文化財活用部埋蔵文化財課課長 菅波 正人

同課調査第1係長 本田浩二郎

同課調査第2係長 藏富士 寛（令和3年度）

井上 薫子（令和4年度）

調査庶務：文化財活用課

内藤 愛（令和3・4年度）

事前審査：埋蔵文化財課 事前審査係長 田上勇一郎

同課事前審査係 文化財主事 神 啓崇（令和3年度）

比嘉 えりか（令和4年度）

調査・報告担当：同課 主任文化財主事 常松 幹雄

II. 立地と環境

久保園遺跡は、月隈丘陵北側から西側の裾部に立地している。第6次調査区は、丘陵裾部西端の福岡空港内に位置している。周辺のこれまでの調査で弥生時代から古代・中世にかけての集落の様子が明らかになってきた。福岡管区気象台によって開発が予定されている14m四方を調査区として設定した。

久保園遺跡はこれまで表1に示す6次にわたる調査が行われてきた。丘陵頂部の天王山公園が標高約43mで、1次調査区は、丘陵部中腹の標高20～21mにあたる。東平尾第一野球場北側の約5,000m²の調査で弥生時代の大型掘立柱建物や祭祀土坑、住居跡が検出された。

2・3次調査は主要地方道路福岡空港線の拡幅整備にかかる調査として実施された。標高6m~8mの丘陵裾部における集落の広がりが確認された。3次調査では溝から前期末から中期前葉の土器が検出されており、弥生時代の集落の開始時期を示している。

4次調査は福岡空港内の駐機場整備のための調査である。標高5~6mの月隈丘陵端部から沖積地の調査である。沖積地では弥生中期から後期の水利に供された溝や古墳時代前期から古代にかけての水田面が確認された。低地における集落の形成が弥生中期に始まり、弥生後期~古墳時代前期まで継続することや古代の条理に合致する畦畔や用水路が確認された。低地の湧水によって保護された弥生時代~後期を主体とする木製農具や拠点集落での出土傾向がある組合式案(机)などが検出された。また青銅製鋤先とよばれる起工具の先端に装着する金属器や銅鏡、1世紀代の中国貨幣である貸舟も検出された。

5次調査区は丘陵北西裾部の標高11mほどの箇所で弥生時代中期の溝、弥生終末~古墳時代の方形周溝状遺構が検出された。

6次調査区は3次調査と道路を隔てた西側の空港内に位置している。地表面の標高は9mほどで、バックフォーにより2mほどの埋土を掘削し遺構検出をおこなった。その結果、3次調査区より1.5mほど低い標高7.3~6.5mで弥生時代中期から後期にかけての溝や柱穴群が検出された。

表1 久保園遺跡における調査一覧

調査次数	遺構・出土遺物	調査面積	文献
1次調査	弥生時代の大掘立柱建物・古墳時代前期の住居跡、中世墓	5,000m ²	市報213集
2次調査	弥生時代の溝、古墳時代前期の井戸	152m ²	市報712集
3次調査	弥生時代の柱穴住居跡・土坑、古墳時代前期の住居跡	373m ²	市報837集
4次調査	弥生時代の溝、掘立柱建物、土坑、古墳時代前期の溝、土坑、古代溝	5,140m ²	市報1148集
5次調査	弥生時代中期の溝、弥生終末~古墳時代の方形周溝状遺構	344m ²	年報35集
6次調査	弥生時代の溝・土坑、弥生土器・近世遺物	200m ²	市報1470集

久保園遺跡がある博多区福岡空港内は、古代の席田郡に属する。「和名類聚抄」によれば席田郡は石田・大國・新居の三郷からなる筑前国最小の郡で、名博本（名古屋市博物館本）には「ムシロタ」や「むしろだ」の傍調がみられる。

正応三(1290)年安楽寺(太宰府天満宮)に寄進された筑前国領中平尾村の小字名に「イマダノマエ」があることから安楽寺領注進状にみる席田郡今田村は同地付近とされる。

貞治二(1363)年四月の島津家文書によると島津貞久が子の師久に譲った所領「筑前国今田村」が「薩摩役所」の記述から南北朝時代には島津氏の所領であった。異国警固の関係で薩摩守護を世襲した島津氏の所領となったものとみられる。

平尾村の南、下月隈C遺跡において8世紀後半に埋没した旧河川から「皇后宮職少属正八位上」某のために何らかの職務遂行を命じた木簡が出土したことから、付近に皇后宮式に関連する土地があった可能性が指摘されている。またこの河川の西側からは「里長」の墨書き器が発見されている。

【参考文献】

- 貝原益軒、伊東 尾四郎1988「筑前国統風土記」増補版、文献出版「筑前国統風土記」は、福岡藩が元禄元年(1688年)に、福岡藩の儒学者、貝原益軒を著者とし、甥の貝原好古、高弟の竹田定直らが編纂した筑前国の地誌である。
平凡社2004「福岡県の地名」『日本歴史地名大系』第41巻
力武卓治2020「弥生時代15赤堀ノ浦遺跡(席田大谷遺跡)」「新修 福岡市史 資料編考古2」福岡市
板倉有大2020「弥生時代18久保園遺跡/席田青木遺跡」「新修 福岡市史 資料編考古2」福岡市
井上謹子2020「弥生時代20席田大谷遺跡」「新修 福岡市史 資料編考古2」福岡市

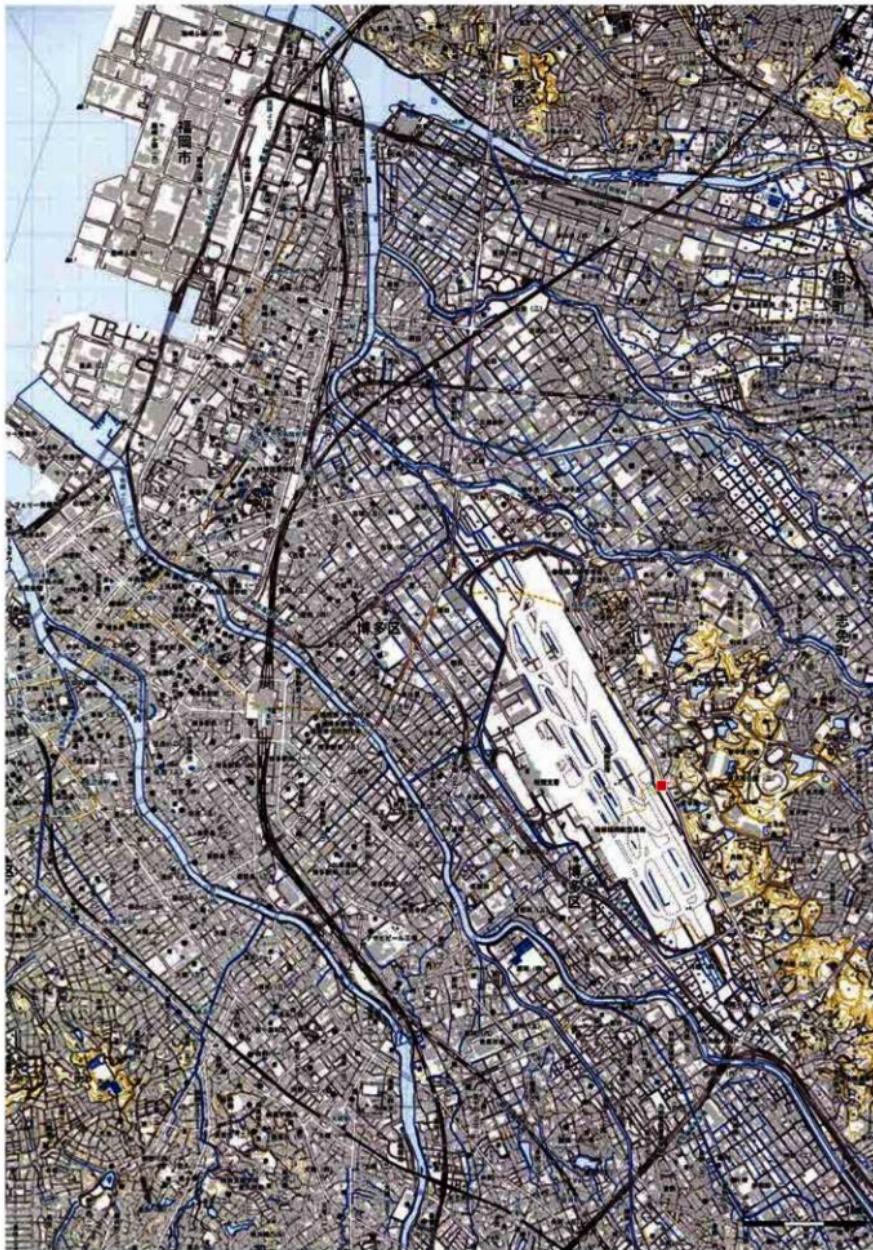


図1 久保園遺跡6次調査地点の位置 (1/40,000) ■6次調査地点

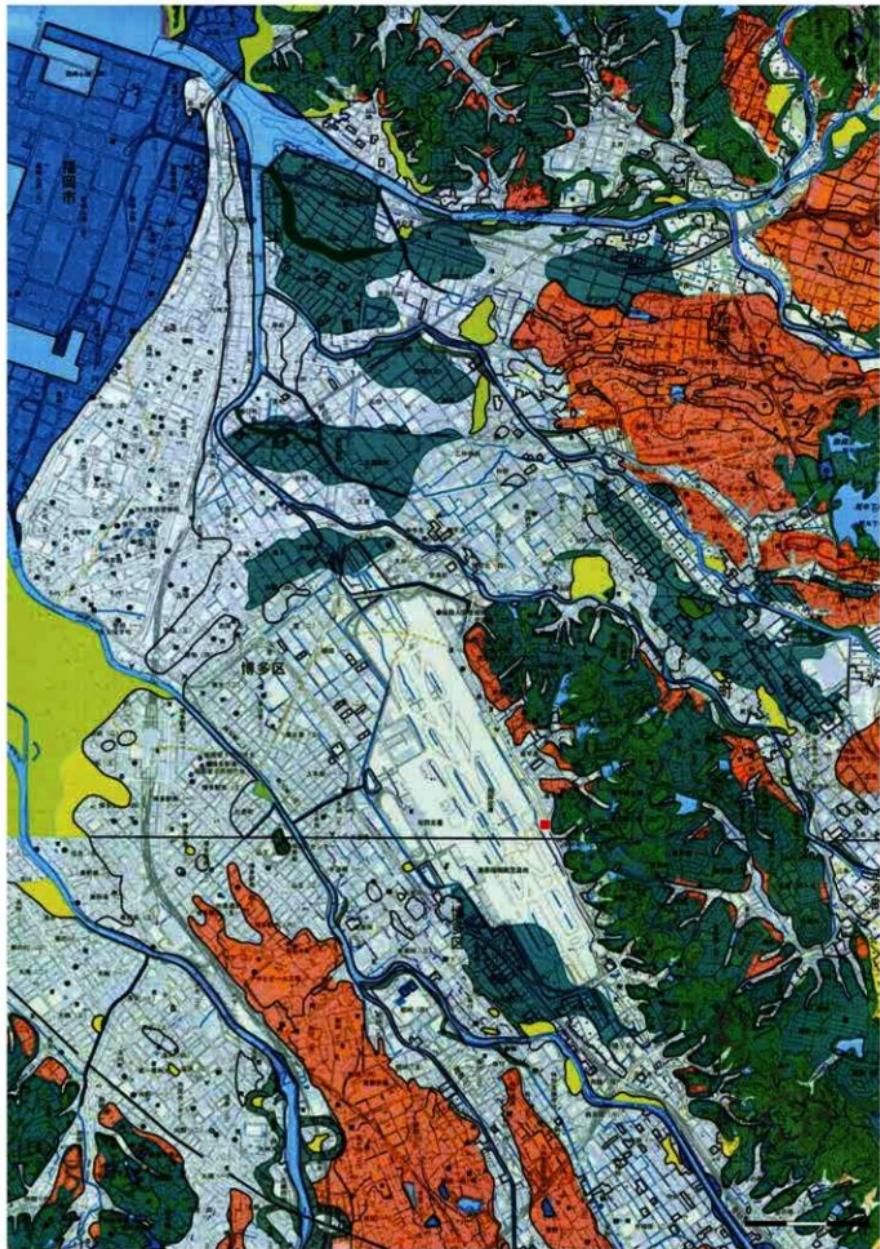


図2 久保園遺跡6次調査区の立地 (1/40,000) ■6次調査地点



図3 月隈丘陵におけるおもな発掘調査地点 (1/4,000)

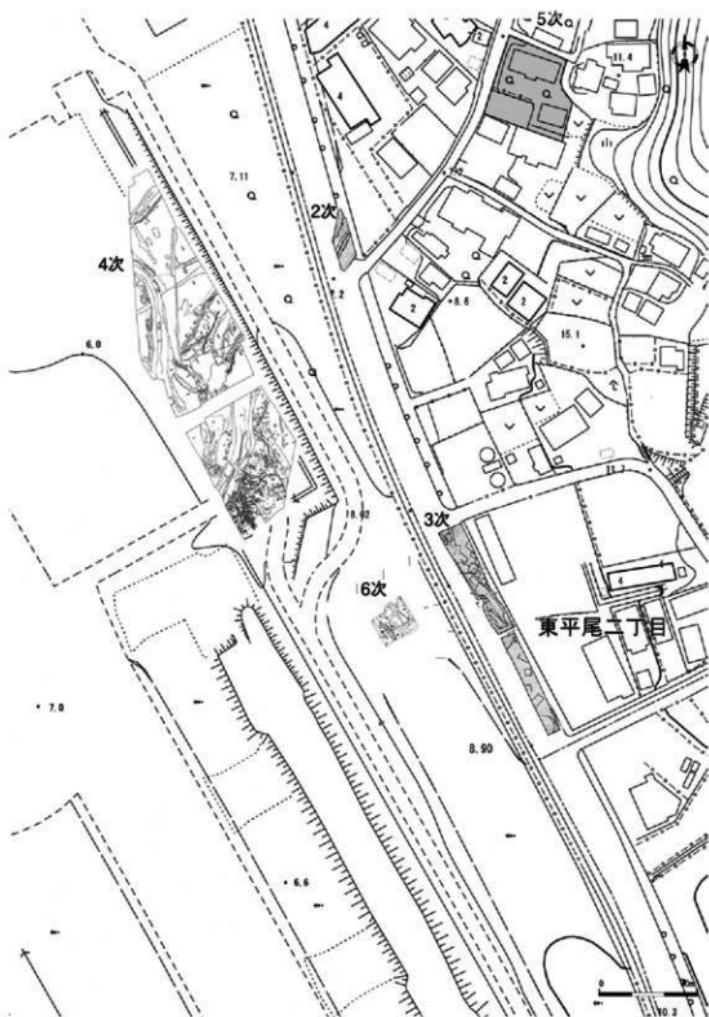


図4 久保園遺跡6次調査区と周辺の調査 (1/2,000)

III. 調査の記録

(1) 調査の概要

地表の標高は約9.041m(基準点26)。地表から-1.5mの高さ7.5mの面で黄白色の花崗岩バイラン土層が確認された。調査区東のGL-1.5mで遺構検出を行ったところ丘陵裾に沿った幅2.5mの礫敷が確認された。礫の範囲は近代の地図にある道路とほぼ重なることから福岡空港が整備され都市計画道路福岡空港線が開通する頃まで使われた道路跡とみられる(図5・6)。この道路面の下層約50cmでは弥生時代の遺物包含層を切る南北方向の溝(8世紀代以降)が検出され、下面で弥生中期～後期の小土坑が確認された。こちらを東調査区とよぶ。

西側のGL-2.5mの高さ7.5mの面では弥生中期～後期の溝(水路)・土坑・柱穴が検出された。溝SK02・17は久保園3次と席田大谷6次調査区の間で確認された谷から派生する流路の支流であった可能性がある。こちらを西調査区とよぶ。

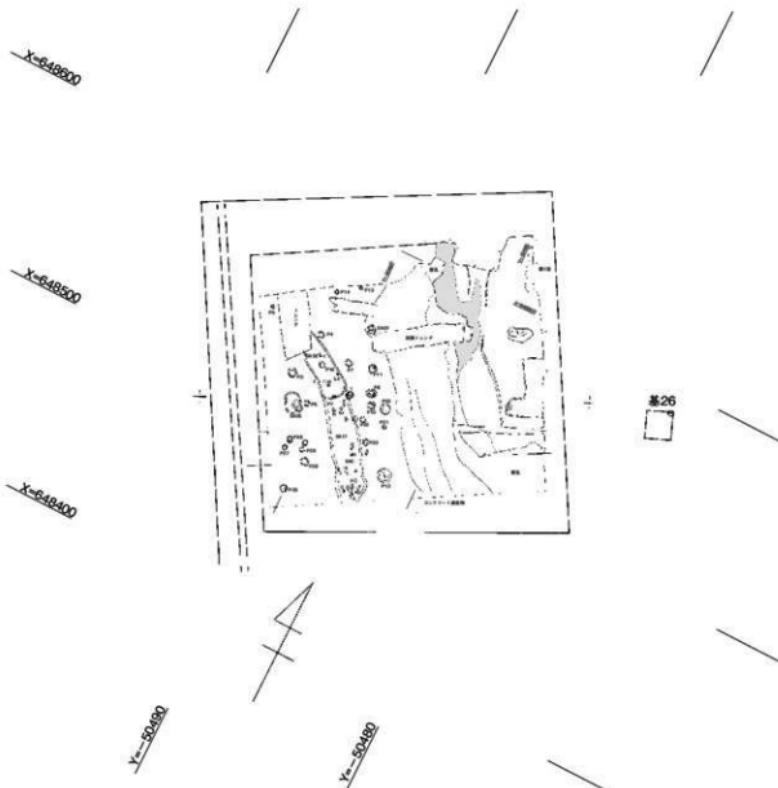


図5 久保園遺跡6次調査区 (1/250)

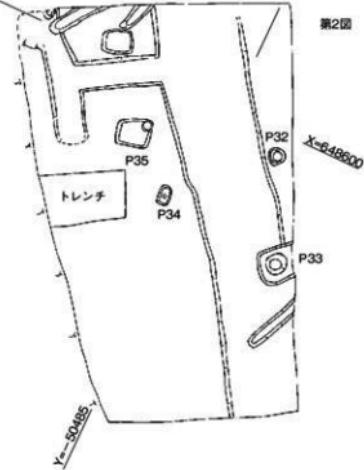
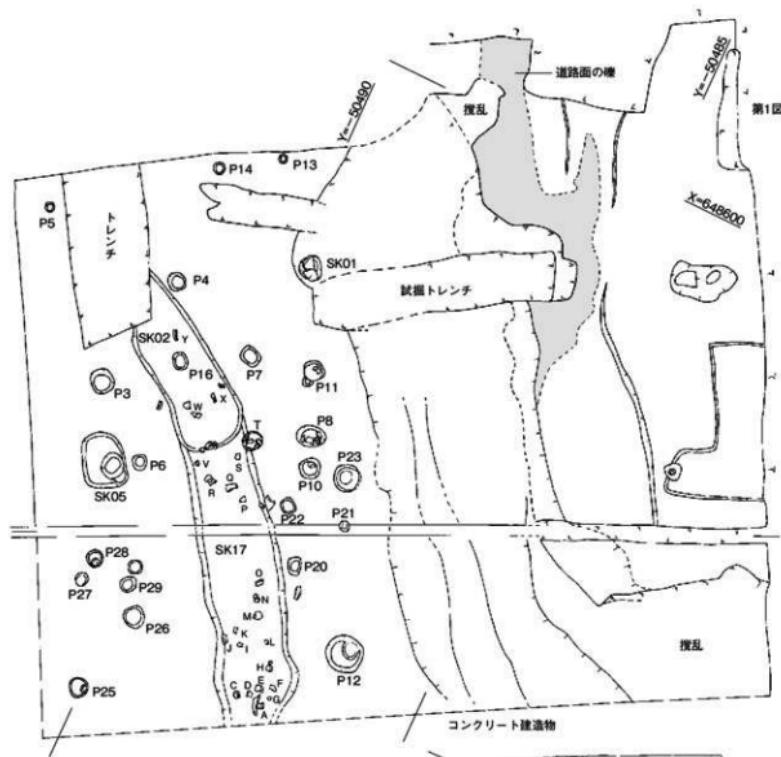


図6 久保園遺跡6次調査区の遺構配置図 (1/80)

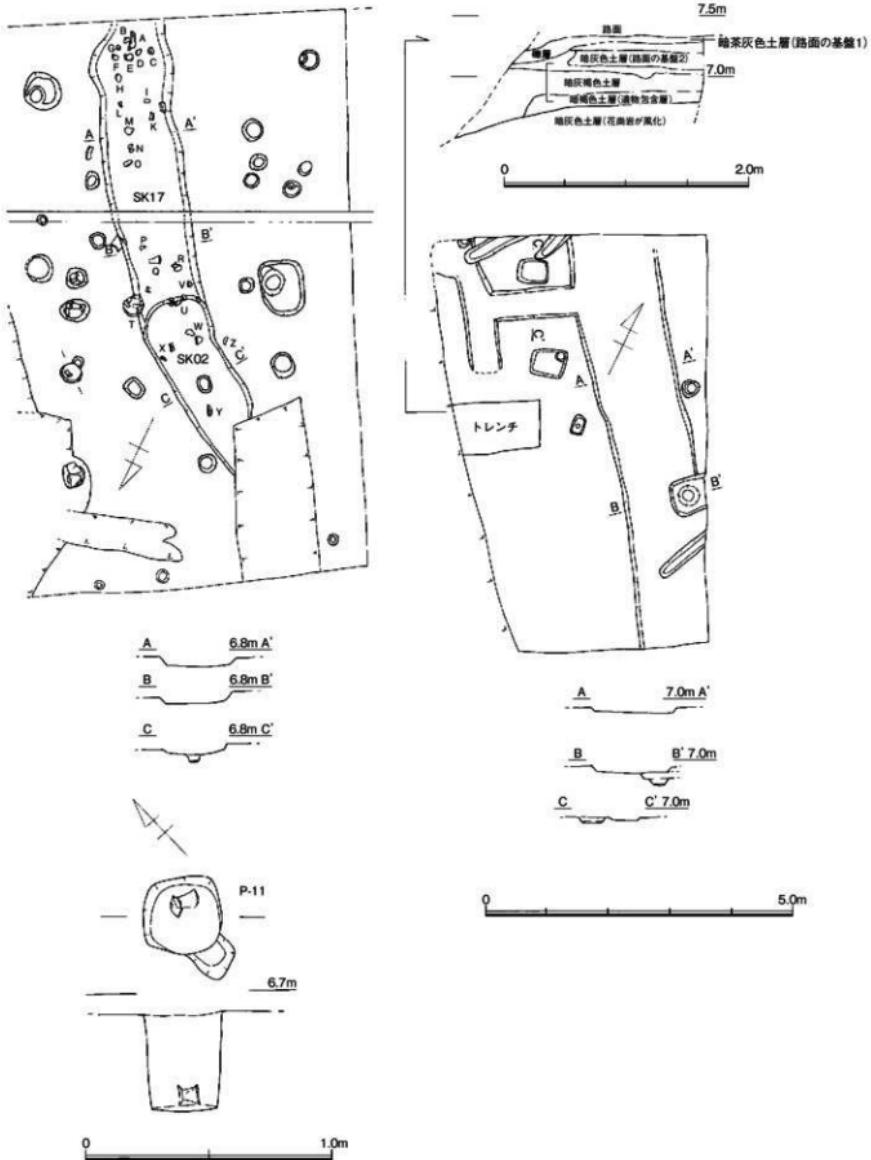


図7 久保園遺跡6次調査区の遺構実測図 (1/80・1/40・1/20)

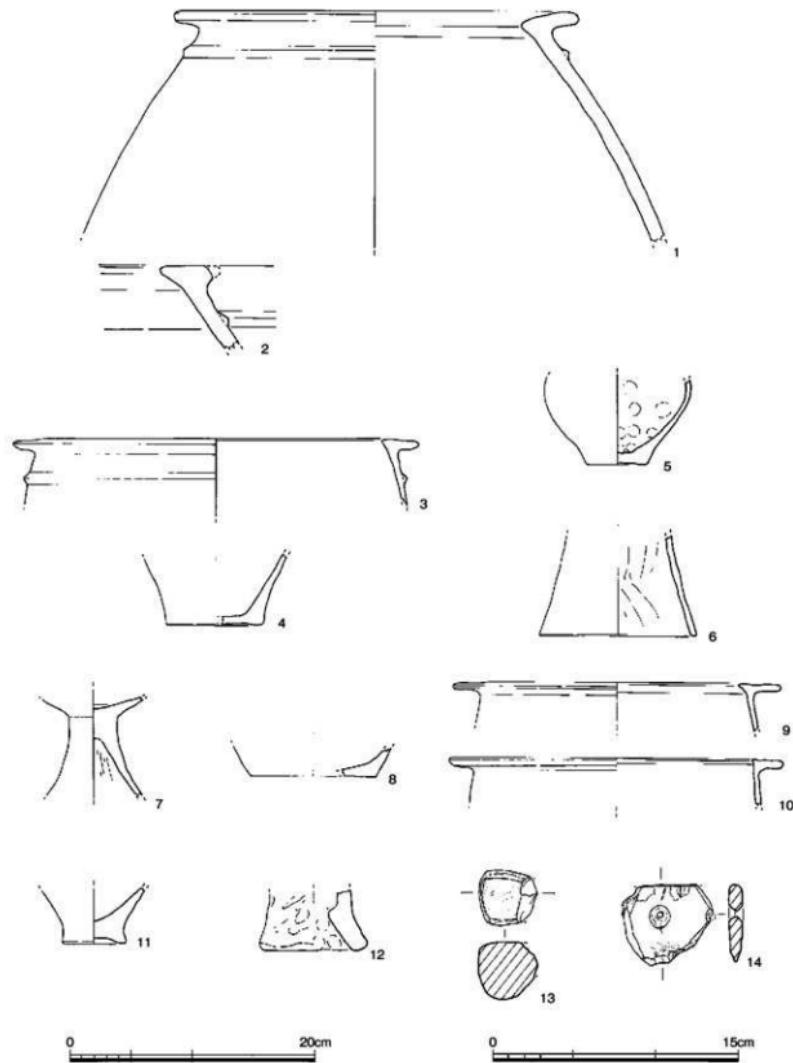


図8 久保園遺跡6次調査区の遺物実測図1 (1/4・1/3)

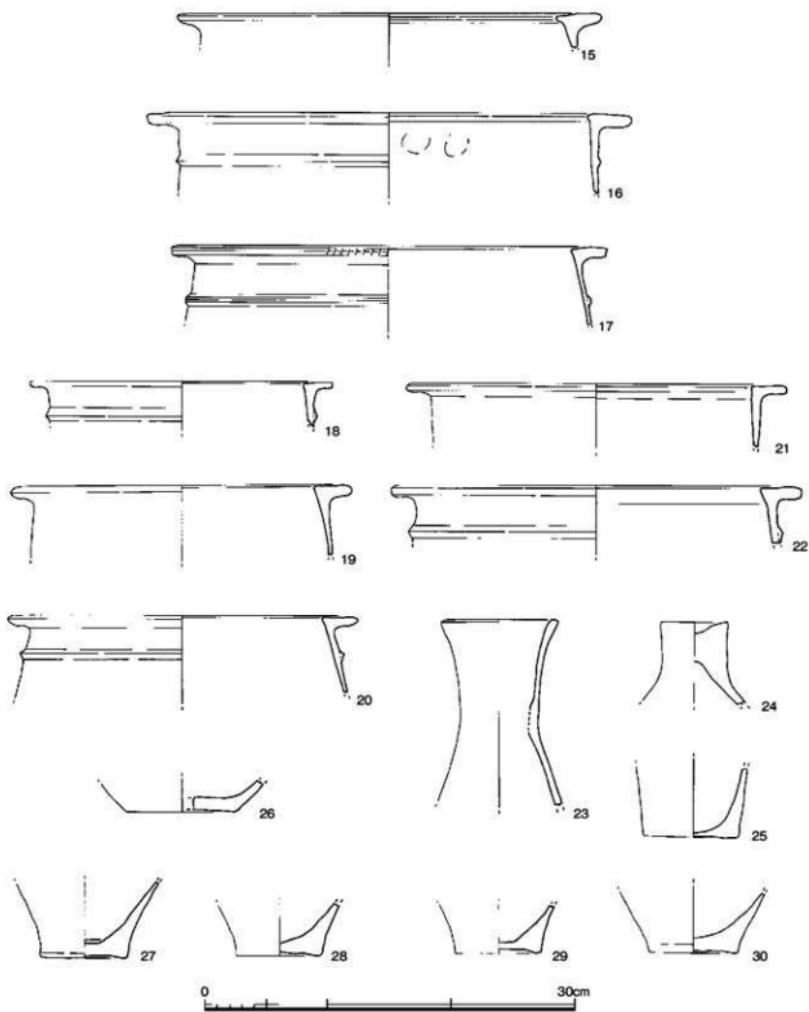


図9 久保園遺跡6次調査区の遺物実測図2 (1/4)

調査区の西側法面GL-1.0mで径30cmの鋼管パイプが確認された。さらに調査区中央GL-2.0mで東西方向の径15cmの鋼管パイプが検出された。さらに調査区の南側では厚さ60cmほどのコンクリートの構造物を検出した(図5・6)。钢管パイプの性格およびコンクリート構造物の用途は調査時点では特定できなかったが、コンクリート構造物は堅牢な構造であることから、さらに南側につづいているとみられる。

(2) 検出遺構と遺物 (図6~10)

試掘トレンチ西側の段落ち部で、甕棺の破片が検出されたことからSK01とした。1は丸味をもつ甕棺の口縁部から胴部にかけての破片である。口径33.0cm。内傾する口縁部をもち、口縁下には断面三角形の突帯がめぐる。

西側の段落ち部は旧地形にそって溝状に窪んでおり湧水がみられた(近代溝)。2は甕棺の破片で口縁部は水平で口縁下には断面三角形の突帯がめぐる。

SK02は不整形の浅い土坑で、当初の遺構検出時に確認された。T2に切られている。3は甕形土器の口縁部で口縁部は水平で口縁下には断面三角形の突帯がめぐる。復元口径33.2cm。4は甕形土器の底部で径8.0cmに復元される。SK02は、南側で検出されたSK17とつながる可能性がある。

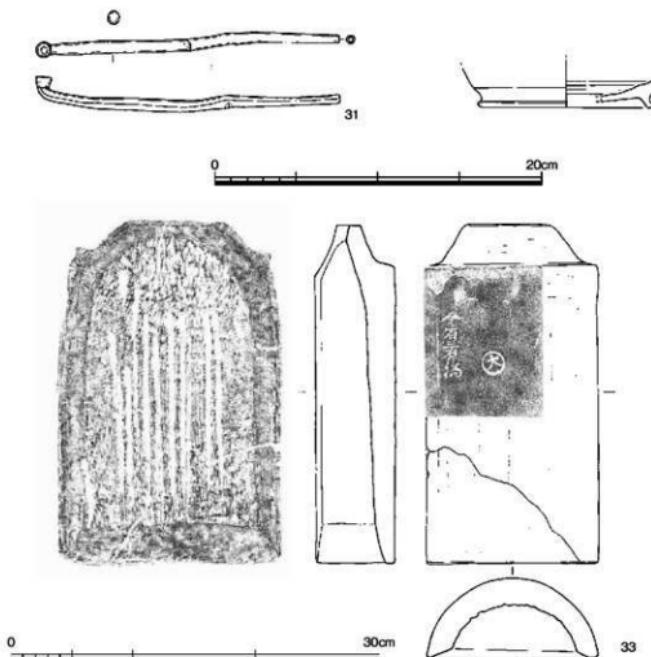


図10 久保園遺跡6次調査区の遺物実測図3 (1/3・1/4)

P10は西調査区東よりで検出された柱穴で深さ約40cmをはかる。5は壺形土器の胴部から底部の破片で底部径5.0cm。6は器台の下半部の破片で裾部径12.8cmをはかる。以上から5は小型の壺形土器で中期後半の時期とみられる。

P11は西調査区の試掘トレンチ南側の土坑である。深さ約40cmをはかる。7は高坏の坏部から脚部にかけての破片である。マメツが著しいが丹塗りの痕跡がうかがえる。8は底部の破片で外湾気味に立ち上がる。径10.2cmに復元される。後期前半。

P33は東調査区の第2面東端で検出された方形と円形掘りこみの柱穴である。9は壺形土器の口縁部で、水平で内側にせり出す口縁部。復元口径26.8cm。10は壺形土器の口縁部で、水平で逆L字状を呈する口縁部。復元口径27.4cm。

11は検出土の上げ底の底部破片。底径5.2cm。12は東調査区の上面で検出された支脚の破片。後期終末。13は砂岩で各面に擦痕がみられる。手持ちの砥石か。重量55.5g。14は東調査区で検出された外湾刃タイプの石庖丁。両面穿孔で穿孔の間隔は3.1cmをはかる。暗青灰色の堆積岩を用いている。

SK17は西調査区の西側で検出された幅1.0mあまり全長4.5mの浅い遺構である。SK02とつながる溝状遺構であったとみられる。底部の標高は6.5m前後で高低差はほとんどみられない。出土土器にはABCなどアルファベットの枝番号をかけた(図6・7)。15(Y)は壺形土器で、水平で内側にせり出す口縁部をもつ。復元口径34.8cm。16(T)は大型の壺形土器で、逆L字形の口縁部をもち、口縁下に断面三角形の突帯をめぐらす。復元口径39.6cm。17(A)は大型の壺形土器で、逆L字形の口縁部をもち、口縁下に断面三角形の突帯をめぐらす。口縁端部に浅い刻目を加えている。復元口径35.6cm。18(P)の壺形土器は、逆L字形の口縁部をもち、口縁下に断面三角形の突帯をめぐらす。復元口径24.8cm。19(R)の壺形土器は、逆L字形の口縁部をもち、口縁端部は肥厚する。復元口径24.0cm。20(W)の壺形土器は、逆L字形の口縁部で平坦面はわずかに窪む。口縁下に断面三角形の突帯をめぐらしている。復元口径28.6cm。21(X)は、逆L字形の口縁部をもつ壺形土器で、復元口径31.2cmをはかる。22(J)の壺形土器は、逆L字形の口縁部をもち、口縁下に断面三角形の突帯をめぐらす。復元口径33.6cm。23(Q)は、筒形の器台で、裾部を欠く。現存高15.3cmで、受部径9.5cmをはかる。24(B)は、蓋形土器頂部の破片で、裾部を欠いている。頂部は凹みがあり径5.4cmをはかる。25(C)は、土器底部の破片で、器種は特定できない。底径7.7cmをはかる。26(K)は、壺形土器の底部の破片で、底径9.0cmをはかる。27(H)は、壺形土器の底部の破片で、底径7.2cmをはかる。28(U)は、壺形土器の底部の破片で、底径7.0cmをはかる。29(N)は、壺形土器の底部の破片で、底径7.1cmをはかる。30(D)は、壺形土器の底部の破片で、底径7.2cmをはかる。

その他の遺物

31は東調査区の検出土で出土した延べ煙管。現存長18.5cmで火皿は径0.9cm、管部は0.65~0.8cmをはかる。にぶい褐色を呈している。32は東調査区の検出土で出土した高台付の須恵器の破片で、底径10.8cmをはかる。33は西調査区の検出土で出土した近世の丸瓦。焼しがかかっており、㊀と今宿三右衛門の刻印がみられる。全長27.8cm、最大幅14.3cm、高さ6.5cmをはかる。内面に布目と吊り紐の圧痕があり、外面は丁寧なタテ方向のナデ調整が施されている。

IV. 弥生時代の久保園遺跡

月隈丘陵の考古資料が知られるようになるのは約1世紀前、東京帝室博物館の高橋健自氏による『銅鋳銅劍の研究』の銅鋳銅劍発見地名表においてである(高橋1925)。同館の和田千吉氏の間書きとして筑前国筑紫郡席田村大字月隈発見とされる不明青銅武器4口が記されている。「二八 鏡及び銅鋳鎧范と共に発掘せられし」という。未だ具体的に事実を確かむるを得ざるを遺憾とする」とある。詳細は今も明らかでないが1982年に赤穂ノ浦遺跡の銅鐸鑄型発見時には、地名表は月隈丘陵の重要性を証左するといわれた。

1972年の宝満尾遺跡の調査では弥生後期の土壙墓群から内行花文昭明鏡・素環頭刀子・ガラス小玉540が検出された(山崎1974・2020)。宝満尾遺跡の銅鏡と刀子は1975年に刊行された概説書『古代史発掘4』に最初のカラー図版として掲載された(佐原1975)。銅鏡は權威の象徴であり、鉄器の使用は生活の変化の指標と捉えられた。立岩遺跡(飯塚市)の厚葬墓の報告が刊行される前段において、宝満尾遺跡の集団墓は弥生社会の発展段階を理解するうえで重要な発見と位置づけられていたのである。

月隈丘陵の北部に位置する久保園遺跡では開発にともなって6次にわたる調査が行われた。図11に「弥生時代の久保園遺跡」として弥生中期後半から後期にかけての土器、木器、金属器から指標となる資料を選び様相を示した。貨泉は鑄造時期を目安とした。

大型建物と土器

1次調査では標高約20mの丘陵の整地面で中央に柱穴をもつ桁行8間×梁行5間の大型掘立柱建物跡が検出された。周辺出土の遺物から弥生中期後半から末に比定される。調査が行われた1980年代はじめまで弥生時代の大型建物はその存在を含めて十分な認識がなされていなかった。福岡市内では吉武高木遺跡、近畿では池上曾根遺跡という大型建物の調査が契機となって各地で再評価が行われることになる。1次調査の平野を望む大型掘立柱建物は、周囲で出土した丹塗り土器から祭祀の上でも重要な役割をになっていたと推定される。

久保園遺跡2・3・4次調査によって丘陵裾部から沖積地の状況が明らかになってきた。土器の構成から弥生中期中頃から後葉にかけての様相をみると、広口壺は口縁端部が朝顔状にひらくものと鶴先状になる二種がみられ、後者には頸部と胴部の境の少し上に突帯をめぐらす器種がある。4次調査では図示したSX14・48・85以外にも複数例が確認された。同様の特徴をもつ壺形土器は、比恵遺跡91次調査(市報898集)でもみられるが、福岡平野南部の春日市や筑紫野市の土器に多い印象がある。御供田遺跡(春日市)ではSK101だけに頸部の付根の上方に突帯をめぐらす広口壺9点以上が図示されている(石川編2020)。

中期後半～後期はじめの祭祀土器は、口がラッパ状に開く大型器台が1次の台地上と4次の低地で検出された。筒形器台、瓢壺、高环の破片は3次調査でも出土している。大型建物とともにう祭祀と低地で出土した土器に型式的な差はみられない。

鐸形土製品

月隈丘陵裾部の3・4次調査では鐸形土製品がまとめて出土した。鐸形土製品は、裁頭円錐形や裁頭方錐形で頂部に2または4の孔を穿つタイプである。4次258は方錐形の三方に穿孔がある。鐸形土製品は南接する席田大谷遺跡4次でも検出されており、市内で最も高い分布を示している。九州北部では吉野ヶ里遺跡や原古賀三本谷遺跡が位置する佐賀県神埼方面とならぶ分布を呈している。久保

園遺跡4次調査では標高5mほどの灌漑に関連する水路で赤彩された短頸壺がまとまって出土していることから中期後半から末頃にかけて、鐸形土製品が水田や水際の祭祀具である可能性がたかまった。

木 器

円盤連結木製品は、4次調査の弥生後期前半から中頃の溝SD03で出土した。硬質のイスノキ材で、紡錘車をまとめて製作する段階の未成品とみられる。穿孔してから切り離すつもりだったようだ。

後期後葉の溝SD05では組合式案(机)の脚部が2点、後期終末のSD32では1点が出土した。脚部に半円形の縫りこみを入れるのは雀居遺跡5次調査SD221(後期後葉～終末)の資料に近い(市報407集)。雀居遺跡や安国寺遺跡(大分県国東市)では縫りこみのある方が外側を向いていたことが出土状況から明らかである。また枘穴が下向にすばまるのは組合式案の特徴に共通する。

組合式案は四隅に枘穴のある天板を脚部が通り、板状となる桟木をおいて脚部の枘穴に鼻栓を挿して固定する構造となっている。穿孔部下には天板を支えるための突起や割りこみを加えている。下村智氏は、組合式案の分布域を集成し、九州北部の後期後葉～終末にかけての拠点的集落にともなう傾向を示し、雀居遺跡や平塚川添遺跡(福岡県朝倉市)では大型掘立柱建物との関連する可能性を説いた(下村2002)。大型掘立柱建物は中期後半にさかのばるが、後期後葉～終末の大型建物の動向にも注視すべきである。

金属器

王莽代の貨幣である貨泉は1世紀前葉に鋳造され西日本にもたらされた。其伴遺物から弥生後期後半以後に埋まつたとみられる。月隈丘陵周辺では下月隈C遺跡(市報795集)で1枚、西側の平野部では雀居遺跡で2枚が出土している(森本2017)。銅鑄は1点のほか青銅製鋤先が4次調査で複数出土している。

まとめ

久保園遺跡が立地する月隈丘陵は、考古学研究の初期の段階から注目され、1970～80年代に重要性を再確認する調査や発見が相次いだ。今回指摘した4次調査で出土した頸部の少し上に突帯をめぐらす壺形土器は、口縁部の属性の型式変化から弥生中期後半～後期前葉にかかることから福岡平野南部の土器の製作・移動の問題として整理したい。鐸形土製品が久保園遺跡付近に集中することは水田や水際の祭祀具として鐸形祭器が浸透していたことを示唆する。

赤穂ノ浦遺跡の銅鐸鋳型はシカが線画で描かれていることなど横帯文銅鐸としては後出するものである。赤穂ノ浦銅鐸鋳型の画題であるシカと鈎は、中期初頭の壺棺に登場し、中期後半～後期前葉にかけて銅戈や瀬戸内の平形銅劍の意匠として採用され、中部地方まで分布域を広げた。赤穂ノ浦銅鐸は瀬戸内以東を見据えて製作された可能性がある。

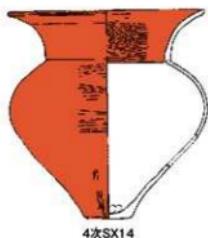
中国貨幣や組合式案については平野部の雀居遺跡や下月隈C遺跡と共に通する資料であり、弥生後期の拠点集落の構成要素として注目される。月隈丘陵の遺跡をさらに広域に俯瞰していくことが今後の課題である。

【報告書】

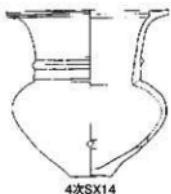
力武卓治1983「久保園遺跡」「福岡市埋蔵文化財調査報告書」第91集、福岡市教育委員会

井上蘭子2002「久保園遺跡2・席田青木遺跡4」「福岡市埋蔵文化財調査報告書」第712集、福岡市教育委員会
吉武 学2005「久保園遺跡3」「福岡市埋蔵文化財調査報告書」第837集、福岡市教育委員会

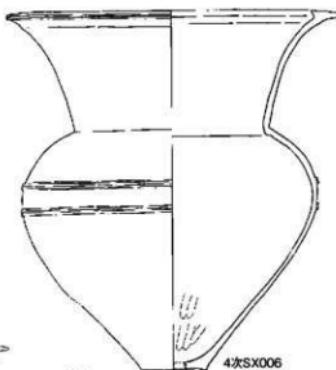
(変形土器)



4次SX14

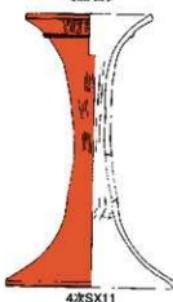


4次SX14



4次SX006

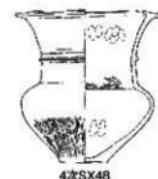
(器台)



4次SX11



4次SD12 - 42(裏)



4次SX48



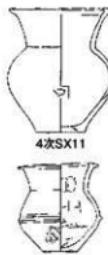
4次SD23



4次SD12



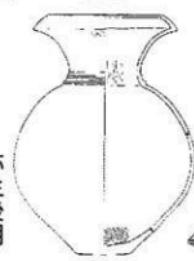
4次SX85



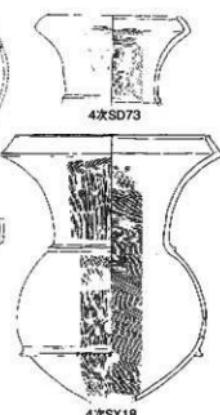
4次SX11



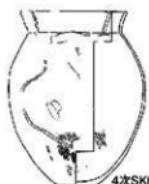
4次SD24



4次SX67



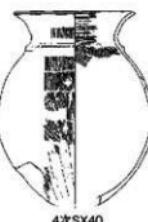
4次SX18



4次SK0805



4次SD32



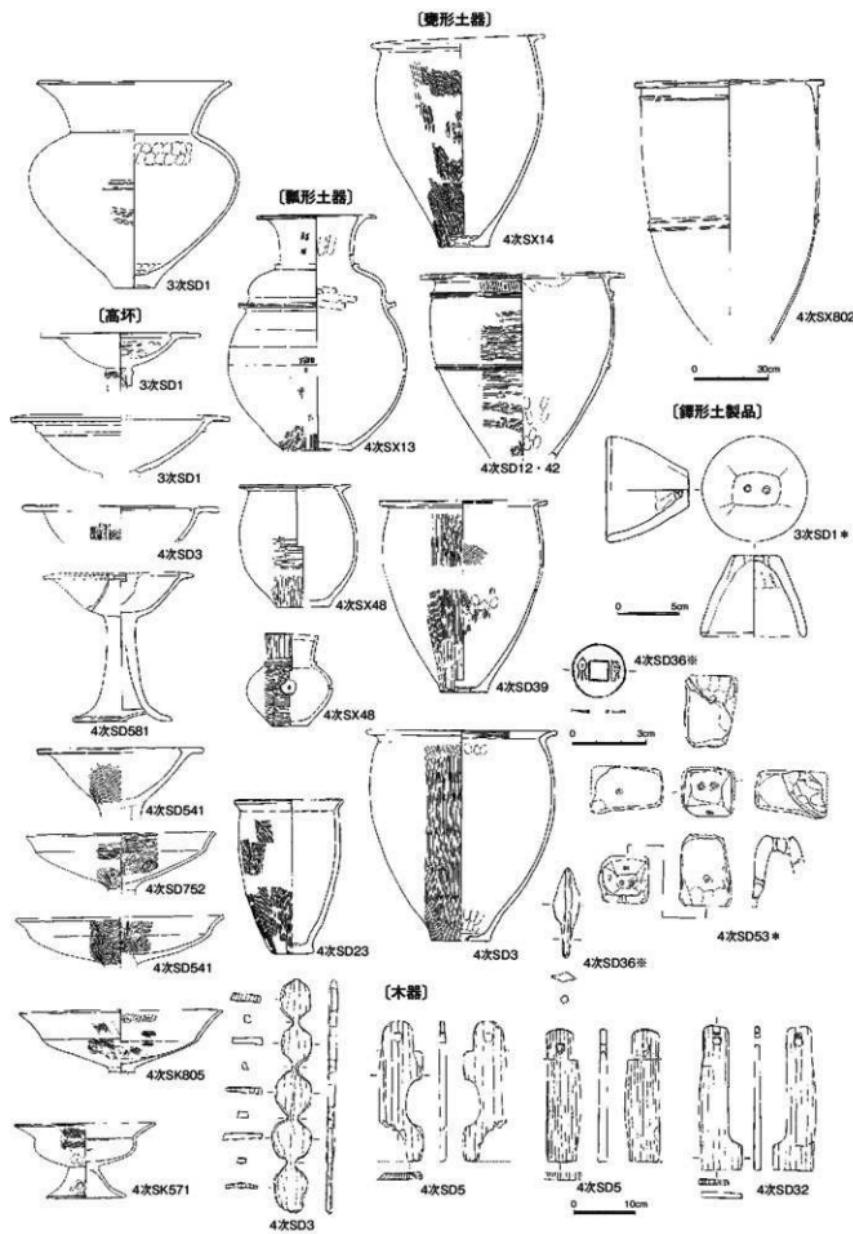
4次SX40

図11 弥生時代の久保園遺跡 1/20 (変形) 1/8 (土器・木器) 1/4 (錐形土製品*) 1/2 (貨泉・銅鏡*)

弥生中期中頃
↓
後葉

弥生後期
↓
終末

0 10cm



榎本義嗣(編) 2012「久保園遺跡4」「福岡市埋蔵文化財調査報告書」第1148集、福岡市教育委員会
福岡市教育委員会2022「福岡市埋蔵文化財年報Vol.35—令和2(2022)年度版—」

【参考文献】

- 石川健(編) 2020「九州大学筑紫キャンパス遺跡群(御供田遺跡)」「九州大学埋蔵文化財調査室報告」第3集、九州大学埋蔵文化財調査室 53-58頁
佐原 真・金間 悠(編) 1975「古代史発掘4 稲作の始まり 弥生時代1」講談社 7頁
下村智2001「安国寺遺跡出土の「井の字形組合せ木器」と木製机」「アジア歴史文化研究所報」第18号、別府大学 組合式案の事例は福岡市内では今宿五郎江遺跡、元岡・桑原遺跡群42・52次調査で確認された。
高橋健自1925「銅鉢銅劍の研究」聚精堂 37頁
板倉有大2020「弥生時代18久保園遺跡／席田青木遺跡」「新修福岡市史 資料編考古2」福岡市
井上蘭子2020「弥生時代20席田大谷遺跡」「新修福岡市史 資料編考古2」福岡市
森本幹彦2017「弥生・古墳時代の博多湾岸に流入した中国貨幣」「福岡市博物館研究紀要」第26号、福岡市博物館 1-10頁
山崎純男1974「宝満尾遺跡」「福岡市埋蔵文化財調査報告書」第26集、福岡市教育委員会
山崎純男2020「弥生時代27宝満尾遺跡」「新修福岡市史 資料編考古2」福岡市
力武卓治2020「弥生時代15赤地ノ浦遺跡(席田大谷遺跡)」「新修福岡市史 資料編考古2」福岡市

V. まとめ

主要地方道路福岡空港線の拡幅整備にかかる久保園遺跡第3次調査では弥生中・後期を主体とする集落がかなり高密度で確認されていた。道路を隔てた今回の発掘調査では、遺構の分布は3次調査に比べてかなり希薄であることが明らかとなった。その原因是、東調査区が月隈丘陵の裾部にあたるため立地的に集落域が制限されたことと近代までの生活道路によって削平をうけていたこととみられる。

東調査区では礫敷の道路面の広がりを確認した後、0.7mほど掘り下げを行い古代の浅い溝と弥生時代の柱穴が確認された。

西調査区は東調査区の下面よりも10~15cm低くなっている。SK02・17は土坑として遺構検出したが丘陵の裾部に並行することから月隈丘陵の谷部から派生する水路であった可能性がある。ここでは弥生中期後半の土器がまとまって出土した。SK01の甕棺の破片が検出された土坑は近世の溝によって削平されていた。近世の溝や試掘トレーンなどから標高6.5m付近で湧水がみられるようになる。

限られた面積の調査にもかかわらず周辺の遺跡立地を理解するうえで有効な所見を得ることができた。調査にご理解ご協力をいただいた機関ならびに地元関係者に改めて感謝申し上げたい。



1 第6次調査西調査区上面(北から)



2 西調査区トレンチ(南から)



3 東調査区SK02(西から)

図版 2



4 第6次調査発掘作業風景
(北西から)



5 第6次調査区 1 (北から)



6 第6次調査区 2 (北から)



7 第6次西調査区(南東から)



8 第6次西調査区(北から)



9 第6次西調査区(北西から)

図版 4



10 第6次調査区SK17(南から)



11 第6次調査区SK17(西から)



12 第6次調査区調査終了時風景
(北から)

報 告 書 抄 錄

久保園遺跡5

—第6次調査報告—

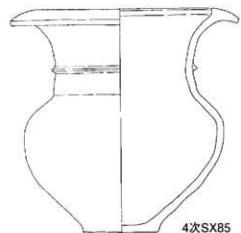
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1470集

令和5年3月23日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 有限会社 成光社
福岡市南区大楠1丁目29番33号

The General Report on
the 6 th. Survey of Kubozono Ruins



4X SX85

2023 Mar.

Board of Education of Fukuoka City